



中高生とともに差別と闘う

「マリアの本音」

吉成タダシ (うずしおブランチ代表)



「誓い」の続きです。

マリアの本音

私の「誓い」に、泣きじゃくるマリアが反応します。

「けど、カレンのお姉ちゃんの赤ちゃんは産まれてこれなかったけど、私は産まれてきたじゃない。捨てるのだったら、産まなかったらよかったのって、…思うのよ。私なんか、…産まれてこない方がよかったです」

思わず大声を張りあげました。「産まれてこなくていい命なんてないぞ！」

こぼれ落ちる涙も拭わず、遠くまでマイクを握りしめるマリアを、ただじつと見つめました。

「でも、産まれてこなかったら、こんな思いしなくてすむし。産まれてこなかったらよかったです、思うのよ。生まれてくるなら、もっと幸せに生まれてきたかったです」

「これから幸せになるうよ。幸せになつたらいいじゃない」

「だって、このなかにも、私みたいな人だっていっぱいいると思う。そんな、そんな、…そんななら、墮ろしてくれた方がいいって、思うのよ。カレンのお姉ちゃんとか、育てられるって思ったなら、産めたら良かったって思うけど。」

私のお母さんも、最初はそうだったって思う。でも、部落差別とかじゃなくても、結婚差別ってあるじゃない。私の場合、もうお腹の中にいたから、結婚して産まれてきたんだけど。

新しいお母さんができて、前のお母さんが私のお母さんだと思おうし。…今のお母さんは友達みたいで、お父さんのことも別にお父さんと思えなくて。一緒に暮らしてなかったら、関係もないじゃない。はつきり言ってる。

このなかにあって、部落差別に遭って結婚する人だっていると思う。部落差別で結婚できない人もいると思う。もしかしたらだけど。それで差別に遭わなくても、子ども産むのなら、最後までちゃんと育ててほしい。

——今、私の家にとこの赤ちゃんがいるんだけど、「これぐらいのときうちに来たのよ」ってお母ちゃん(母親代わりの祖母)に言われて、何か悲しくなってる。…何で私って産まれてきたのかなって、思うじゃない。

だから、もし私に赤ちゃんが産まれたとしたら、ちゃんと、劇の登場人物みたいにちゃんと産んで、育てたい。私は努力ができないから、もしかししたら最後まで育てられないかもしれないけど、でもちゃんと、自分に子どもができたなら、私みたいな思いはさせたくないから、がんばりたい」

逃げないこと

マリアの悲痛な叫びに、自分はどうやっていけばいいのか。その場にいる者はどういけばいいのか。この先、いつか自分たちに何ができるのか。本当に真剣に考え込んでしまっただ。

その後、スーツと手を挙げた生徒

がいました。それがこの授業の最後の発言となりました。

「えっと、授業の初めの方に、駆け落ち…说得できなかったら、駆け落ちしてでも出て行くみたいなことを僕は言ったんだけど、今、いろんな意見を聞いて…」

彼はこの授業の初めの方で、結婚差別について次のような発言をしています。

「両親に反抗的な態度をとって、無理矢理説得するっていうか、無理矢理当たっていったら、それで理解してもらえなかったら、オレは結果的に逃げるといって形になってしまいうんだけど、別の所に二人で住む。まあ、逃げの形をとってしまおうと思います」

その時点での、彼なりの結論でした。これには、地区出身のアキヒサが共感を示しつつ、食いさがる発言を返します。

「オレはそれでもいいと思うのよ。駆け落ち。シブいじゃないですか。だけど、一生その人と暮らしていくわけじゃないですか。そしたら、やっぱり少しいでも反対されたまま押し切って結婚するっていうのは、自分らは大丈夫かもしれないけど、やっぱり後ろめたいところは一生つきまとい続けるわけ。だからやっぱり、僕の考えとしては、そういう考えもあるけど、やっぱり結婚するのだったら、親戚中や家族中から祝福されて結婚したいっていうのが、まあオレの考えですね」

そこには、「簡単に駆け落ちなんて言っただけで済まない」という、強いメツ

セージが込められています。簡単に言ってるつもりはないのかもしれませんが、やはりそれは、軽々しく聞こえてしまふのです。

しかし彼は、これまでのレナやミナコ、カレン、マリアの発言を聞き、自らの発言をふり返るのです。

「…その時は、結構考えてたつもりだったんだけど、全然深く考えられてなかったなって。結婚する二人だけの問題じゃなくて、やっぱりこれから親戚になる両方の二人の親とか、その親戚、みんなにわかってもらって結婚しないといけないって思ってた。僕さっき、逃げるみたいなことを言ったけど、そういうこと言ったのを撤回して、ちゃんとみんな、…やっぱり逃げたら駄目だなって、思いました」

生の声、本当の思いが、いかに人の心を変えていくか、そのことを彼の言葉から思わせられました。やはり、「本音で語り合う」ことなのだと思います。そして、逃げないこと。場面によっては「逃げるが勝ち」ですが、それでも最終的に、逃げないこと。あきらめないこと。それが、あの場にいる者、私自身に問われたのだと思います。そして、今の私がいるのです。

あのとこの子どもたちを想うと、私は背を向けたくありません。大げさですが、その想いを背負って、笑顔で堂々と、差別を迎えてやるう、生涯を賭けて生きていこうと思うのです。